
DEVISNT

移動図書館

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVISNT

【Nコード】

N2457BA

【作者名】

移動図書館

【あらすじ】

裏の世界に巻き込まれる

1話

この日家に帰るのが早ければ巻き込まれたりはしなかっただろう…

「あ、もうこんな時間、早く帰らないと。」

私の名前は鈴野 三木、高校1年今家に帰宅途中。

「急がなきゃ怒られるー。」

そう今は夜の8時過ぎそろそろ帰らないとまずい時間帯である…。

言い訳を考えつつ（友達の家で遊んでいたなんてとても言えない）

家路を急ぐ。

川の近くに差し掛かったところで、

「ん？あれなんだろう？…えっ、人！？」

空から人が落ちてきた。落ちてきた人はそのまま地面に激突し、

道路にひびを入れた。

「え！？これ何！？映画の特撮か何か！？」

私はパニックになっていた。

「…うう…。」

あんな高さから落ちてきたのにまだ生きていた。

おかげでもっとパニックになりかけた。

「はっ。」

（いや、落ち着くのよ私。まずは救急車を呼ばないと…）

携帯を出そうとしたとき、

「こ、これを…、“大佐”のところへ届けなくては…。」

何やらチップを取り出した。

「だ、誰か…れを…、た…さに…。」

「しゃべっちゃ駄目。今救急車呼ぶから。」

「そこに誰かいるのか…？だったらこれを頼む…。」

とさつき取り出したチップをこちらに差し出してきた。

それを受け取り

「これをどうすれば…」

「これは…、奴等に渡しては…、いけない…。必ず“大佐”のもとへ…。」

と、急にその人の手から力が抜けた。

「…息…、してない…。」

その人は死んでしまった。

「け、警察に、で、電話を…。」

『おつ、みくけた、ここにいるぞ』

上から声が聞こえてきた、

上？

『たしかに先ほど追っていた奴だな…、どうやら死んでるようだな…。』

『んなもん見りゃわかんだろうが、それよりその女誰だよ？』

上を見上げるとフード付きコートを着た2人の人が宙に浮いていた…。

右にいるほうが少し背が低い、まだ10歳くらいだろうか、左のほうは20歳ぐらいに見える。

「なんで、宙に浮いてるの…？」

「かつ、そんなのおめーにはどうでもいいことだろうが、」

と言って右腕を横に振り言った

「どうせ死ぬんだしさ」

「え？」

その右手には刀が握られていた。

「おつと、この刀は本物だぜ。映画とかに出てくる偽物じゃなくて。」

「おい、一般人に手を出すことはないだろ」

「な〜に甘いこと言ってるんだよ、うちのモットーは【誰であるうと容赦なく】だろ？それに、」

「それになんだ？」

とこちらに刀の切っ先を向けて

「あの女奴から何か受け取ったぞ」

(まずい、見られてた!!!)

とっさに右腕を隠す。

「…だったら仕方がないな、もう一般人ではない、関係者だ。」

とその男の体に変化していった背中から翼が生えて両腕から爪が生えた。

「おい、小娘奴から受け取ったものを出せ、そうすれば楽に殺してやる。」

「うう…。」

(どうしよう、どうしよう、ここは逃げるしか…。)

「あ、逃げようなんて考えるなよ。この近辺には俺らの部下もいるし俺たちは宙に浮いてるんだからすぐ見つけれる」

あっさりと策は消える。

「ほら早く出せ。」

「俺的に出してくれないほうがいいけどね、そしたら…、きゃは。」

「だんだんと周りの音が遠く、景色がゆがんでいく。」

(もう、どうでもいいや…。)

右手を差し出そうとした

『さて、それを渡すな。』

「なっ、お前は」

「ちっ、めんどくさくなっただな…。」

『はいはい、そこのお二人さん、今日も1戦やりますか？俺的には今日は勘弁してもらいたいから見逃すよ。』

と言いながらその男は後ろから歩いてきた。

さっきの2人と違い私よりちよっと上ぐらいの男だ。

「俺が来たからにはもう大丈夫だ。君、大丈夫？」

「え、はい、大丈夫です…。」

「そう…。」

と急にこつちを眺めてきて

「君かわいいね。」

「…はい？」

「よかつたら俺とどこか行かない？あ、こんな時間じゃ駄目か…。」

「

「え？」

「あ、そつだ名前は？俺川島 康成つて言うんだ、やつすーつて読んでくれるとありがたい」

「…」

「よかつたらメアドと電話番号交換し…」

「てめえ！！何俺らを無視してんだ！！切り刻むぞ！！」

と忘れられてたさっきの2人のうちの背が低いほうが叫んできた。

「あ？せつかく人が見逃すつて言つてんださつさと帰れよ。こつちはナンパしようとしてんだよ」

「あゝ、なるほどなるほど…。てめえの態度はよく分かつた…。殺す！！」

2人の間に殺気が走る。

「さて、奴らとの戦闘は極力控えたほうが…。」

「うるせえ！！てめえは黙つてろ！！そんなに戦いたくなかつたらアジトに帰つてろ！！」

「くつ…、分かつた、私は帰らせてもらつぞ…。負けても知らないからな。」

「はっ、俺がタイムマンで負けつかよ。見てるアイツらの首もつて帰つてきてやるよ。」

「せいぜいがんばるんだな。」

と背が高い異形のほうは飛び去つて行つた、それをにやにやしなから残つたほうが見ている。

「…、今逃げて行つた奴のほうはまだ頭がいいな…。」

「あ？俺が頭悪いと言いたいのか？」

「言つた通りだ通じなかつたのか？」

「ふゝん…、死ね！！」

と急にその男は斜め上からこちらへ刀を振り上げて飛びかかってきた。

しかも

「は、早いつ!？」

常人には到底かわせない勢だった。

土煙が止みその男の足元には切り裂かれた川島が…。

「なっ、いないだと!？」

その男の足元どころか周りにもいない。

「ど、何処だ!？隠れてないで出てきやが…」

「ここだよ」

さきほど男がいた位置に川島がいた。

涼やかな笑みで男を見ていた。

「ためえ、何しやがった、俺のあの一撃は回避不能のはず…。」

「まあ通常の数値ならね。」

「通常だと？まさかお前…!!」

「そう僕の身体能力すべて上昇させてもらった。僕の能力…。」

「“ハリー・アップ”で。」

1話（後書き）

とりあえず書いてみました
思いつき次第書くので時間がかかるかもしれません

2話

「ハリー・アップ」?

「そう俺の身体能力は今通常より2倍ほど高い、だから君のさっきの一撃は俺には2分の1の速度に見えた、君のその刀は俺には届かない。今ならまだ遅くない。退け。」

「退けと言われてハイそうですかと簡単に退けるわけが…、と急にこちらを見て。」

「ねえだろうがああああ!!」

こちらに突進してきた。

「この女だけでも殺してやらああ!!」
死ぬ?

「きやああああああ!!」

グサツ!!

「あれ?痛くない…。つ、川島さん!!」

川島が刺されていた。

「ひ、ひやははははあはは!!一般人かばって刺されてやんの。ざまあないぜ!!」

「……………いてえ」

「あ、まだ生きてんのか?しぶといやつだ」

「こんなもん女子に向けるんじゃないやねえー!!」

「ぐあはあつ!!」

川島は思い切り男を殴った、“ハリー・アップ”+謎の怒りですさまじい音を立てたパンチだった。

で吹っ飛ばされたほうはそのまま橋の手すり破壊して川に落ちた。

「女に手を出す奴は俺がゆるさねえ…。」

「川島さん!!大丈夫ですか!？」

「え?こんなの全然平気…。」

と急に倒れた。

「と言いたいとこだけど平気じゃないな。急所は外れてるけど
流石に痛いかな。」

「今救急車呼びます。」

「救急車呼ばなくても大丈夫。」

「だってこんなに血が…。」

「君がそばにいてくれれば…、きつと治るから。」

「…やっぱり呼びます…。」

「あつ、ちよつと待って、今の嘘だから、お願いこっち向いて…、
痛たたた。」

騒ぐだけの体力があれば大丈夫だろうと思っただけれど、念のため
に救急車を呼ぼうと思つた時、

『あゝ、いたつすよ。川島さん、負傷しているようつすが…。は
い、密偵者もいるつす、あゝたぶん死んでるつすね。ああ、あと
なんか、一般人が1人つす、はい、わかつたつすよ。…あゝやつと
見つけたつす大変だつたんすよ。川島さん』

と川島さんと同じくらいの人が後ろから来た。

「おお、渡辺、ご苦労だつたな。で回復班は？」

「今呼んだつすよ。そんなことより渡辺さん。」

「なんだ？あと先輩だるせ・ん・ぱ・い。」

「はい先輩、今日非番でしたっけ？」

「んゝ非番だけど。どうかした？」

「…当直表見たら非番じゃなかつたつすけど…。」

「えっ！…痛たたたた…。」

「“大佐”ご立腹つすよ。」

なんかよくわからないけどまず状況を整理しよう。

？私は友人宅より自分の家に帰る途中だった。

？そして空から人が落ちてきた。

？その人から“大佐”って人に渡さなければならぬチップを受
けとつた。

？そしたら宙に浮いている2人に殺されかけた。

？すると“川島”という人が助けに来た。

？その人が1人吹っ飛ばした。

？川島って人の仲間が来た。

？その人が“大佐”という名前を言った。

「あ、私…。巻き込まれてる…。」

災難が去ったのになぜか喜べない。

「ん？その人は誰っすか？」

「ああ、名前聞いてない…。手出すなよ俺がナンパするんだからな…。」

「うん、怪我人は黙ってるっす」

「えと、鈴野 三木です…。」

「ふうん、三木さんすか。」

「おいこら、お前は鈴野さんと呼べ。俺は三木さんと呼ぶから」

「えと、渡辺さんでしたっけ？三木でいいですよ。」

「おお、見るよこの寛大さ、お前も少しは…。」

「回復班到着したっすよ。」

大型ヘリが到着し、中から白い服を着た集団が出てきた。

「怪我人はその馬…。じゃなかった、先輩だけっす」

「今さりげなく馬鹿って言おうとしただろ…。怪我治ったら模擬戦だ…。」

「怪我人は静かに。」

川島さんは班長らしき人に黙らされ、渡辺がそれをにやにやとみている。

「あ。」

あの死んだ密偵者が担架に乗せられ布をかぶせられて4人の人に運ばれて行った。

「では三木さん」

「ひゃい！！」

気が付いたら横にいた渡辺に声をかけられてびっくりした。

「え」と本部に来てくれるっすか？どうせ明日は土曜日だし家に

はこちらから連絡入るっすよ」

「家には私から…。」

「こちらから話したほうがいいすっよ。」

「でも今家叔父と叔母しか…。」

と渡辺が固まる。

「え〜と親は共働き?」

「事故死です…。」

「…。ごめん…。聞かないほうがよかつたっすか?」

渡辺が申し訳なさそうにそう言った。向こうでは川島がすごい形相でにらんでいる。

「では連絡入れておきます。」

その時渡辺が、

「ん、待つつす。」

「どうかしたんですか?」

「下がってるっす。なんかくるっす」

と川から水柱が上がって。

「はっはー!! あんなパンチ一発で俺が死ぬと思ったか!!」

「あゝ、何すかあいつ?」

「さっきの人です」

思いつきり殴られたせいで左頬が腫れているけど。

「さっきのやつは治療中か? だったら今お前ら皆殺しのチャンス

だな?」

刀が2本になり両手に構えている。

「渡辺さんは? 戦えるんですか?」

「ん? 無理っすね。俺補助向きっすから。回復班も無理っす。」

てことは今まずい状況では?

? 川島さんは戦闘不能

? 渡辺さんは戦闘向きではない

? 回復班も戦闘向きではない

? 私は一般人

「ひやはははは！！じゃあお前ら全員ここで死ねよ！！」
と叫びとこちらに突っ込んでくる。

「はははははは！！死」

「ダンッ！！　ダンッ！！」

銃声とともにその男は倒れた。

銃声は2発、男の頭部中心と心臓を的確に打ち抜いていた。

男は先ほど笑っていた表情のまま死んでいた。

「ヒュ」。流石は瑠璃っす。」

と渡辺はヘリのほうへ顔を向けていた。

そちらを向くと窓から10歳くらいの少女が名前は分からないが
スナイパーライフルを持っているのが見えた。

「え、あの子が撃つたの？」

「そうっすよ、瑠璃はうちらの中で一番の命中力っすから。」

その瑠璃と呼ばれた少女がこちらに手を振ってきたので手を振り
かえす。

「危険は去ったようっすね」

と渡辺は先ほどのように脱力した。

「わかるんですか？」

「俺の能力“センスイティヴィティ”のおかげっす」

「えセンス…、ティ…？」

「はつきりと敏感と言え敏感と」

と気が付いたら渡辺の後ろに川島がいた。

「それだとかっこ悪いっすよ…。」

「かっこ悪いも何もないだろ？言いくいし。」

「だところら。やるっすか？」

「やるかー？」

「はいはいそこまで怪我治ったと言え応急処置ですから安静に、
あと本部に戻りますよ」

「ちっ命拾いしたな」

「そっちこそっすよ」

私この先大丈夫なのかな？へりのほづを見れば瑠璃は寝ていた。

3話

「えと、もしついでに行かないと言えば…」

私は今一番気になっていることを聞く。

「ん、その場合は君の持つてるチップだけ持って行く予定っすけど?」

渡辺がそう言ったのでとりあえずは命の危険はないのだろう。

(口封じとかで殺されるかと思った…))

それじゃあ渡そうかなと思つて右手を上げようとした時、

「でもさっきの敵は2人いて片方は逃げただから鈴野ちゃんの顔はもう覚えられているだろう…」

「えっ!?!先輩片方に逃がしたんっすか!?!」

川島の言つとおりさっきの戦闘で川島の逃げろという警告を素直に聞いて逃げていった敵がいた。

「…いや、ほら、俺つてさ非番だったし、無益な殺生とかは…」

川島があたふたと理由を話すが

「先輩鈴野さんを口説きたくて仕事疎かにしただけっすよね?」

「うっ」

はつきりと本当のことを言い当てる。

「それに先輩無益な殺生はと言つたっすけど、先輩仕事の時は容赦ないっすよね?」

「ぐっ」

追い打ち

「それに今日の非番理由だって、ほんとには非番じゃなかったけど…。ただ単にナンパのためっすよね?」

「…」

さらに続ける

「でもって誰にも相手されなかったからぶらぶらその辺を歩いていたら偶然彼らを見つけたと」

「ぐはっ!!…!」

それが止めだったのか吐血し倒れる

「ん? ああ!! 川島さんが倒れた処置を急げ!!」

倒れた音に気が付いたのか回復班の班長が気づきあわてて作業を
始めようとする

「ああ〜こいつ…じゃなかった、先輩気絶しただけっすほっとけ
ば目を覚ますっす」

「し、しかし血を吐いているが…」

「きつと涎っす。今日トマトジュース飲んでたっすから」

「いや、トマトジュース飲んだからって涎は赤くは…」

「さ〜基地へ急ぎましよう!!」

班長との押し問答を（無理やり）終わらせてこちらを向く

「で、どうするっすか? 来るっすか? 来ないっすか?」

（どうしよう…。たしかにさっきの片方は逃げたから私の顔知ら
れてるだろうし、それにこの周りには彼らの部下もいるって言うて
たし…。）

彼らの様子を見れば気絶した(?) 川島を收容し、渡辺がへりの
入り口で答えを待っている

（ええ〜い、もうどうにでもなれ!!）

意を決して言う

「わかりました、そっちについて行きます!!」

「分かったっす。ではどうぞへりへ」

渡辺が手を差し出してきたのでつかまりへりに乗る。瞬間何やら
渡辺が震えた

「どうかされたんですか?」

何やら顔色も悪い

「いや…、殺気が…、まさかね…」

と、ちらつと救護室を見る

「あいつ、気絶してるのによく分かるっすね…、まさか地獄耳な
らぬ地獄気配っすかね…」

なになら眩いているが鈴野には聞こえなかった

「…椅子に、座らないの…？」

「ひゃうっ!？」

急に後ろから声をかけられてびっくりした、振り返るとさっき狙撃をした少女が立っていた

「ご、ごめん急に声かけられたからびっくりしちゃった」

「…そう…。…ごめんなさい…」

とぺこりと頭を下げる

「瑠璃は静かだから気づかれにくいんっすよね。この前だって瑠璃探して“大佐”が…」

「…そんなことより、この子椅子に座らせないの…？」

「あつと、忘れてたっすこっちへ」

と空いていた椅子へと連れて行く

「これ先輩のっすけど今気絶してるし座ってもいいっすよ」

「あ、ありがとうございます」

川島の席に座るとふと外を眺めてみた

「わあ、すごい景色」

「あ、鈴野さんはへりに乗ったことがなかったんっすね」

「はい、初めてです。つて、渡辺さん、また顔色が…」

横を見るとまた顔色が悪くなっている

「…いや、また殺気が…」

とまた救護室を見る

「…まさかね…」

ふと瑠璃のほうを見るとすやすやと幸せそうに眠っている、見ているとこっちも眠くなってきそうだ。

「あれ？なんだか眠く…」

「たぶんあんなことがあった後っすから緊張が途切れたんっすよ」

たしかにさつき命が狙われていた状況だったのでそうなのだろう

「眠っても大丈夫っすよ、基地についたら起こすっすよ」

「そ、そうします…」

そして目の前が真っ暗になる

……。

……。

……。

「す……さ……」

「うん」

何やら声が聞こえる

「すず……ん」

「みんやむにゃ」

また聞こえる

「すずの……ほがあ……！」

「にゃっ……！」

目を覚ます気が付いたらへりの椅子ではなくベッドにいた、そして床で渡辺が倒れている

「ためえ鈴野ちゃんがこんなに気持ちよさそうに眠っているのに邪魔するのか!？」

「せ、先輩の声のほうが……、十分邪魔っすよ……」

「あっ!？何を!？やるかこら……!!……って起きてる……」

「鈴野さんお目覚めすつか？」

「お前の声のせいだな」

「先輩のっす」

「……」

「……」

と怪しげな雰囲気になってきた、今すぐに殴り合いでも起きそうな「え、えと……。喧嘩は、いけないと……」

「鈴野ちゃん、ちよつと目をつぶっててね。このバカに説教を……」

「そうですね目をつぶっていたほうがいいっすね……。このあほを今すぐに仕留めるっすよ」

『そこまでだ、双方落ち着け』

「「なっ!？」」「」

扉に軍服を着て筋骨隆々な男性が立っていた
「「だつてこのバカ（あほ）がっ！！」」
「お前らな…、喧嘩なら違つところやれ」
「本当ですか（つすか）！？」
「ただしあとで始末書を書くのならな」
二人のテンションが目に見えて急降下していく
それほどこの人が偉いのだろう、まさか
「も、もしかして“大佐”ですか？」
この人ならあり得る
「いや私は“大佐”ではない、“大佐”なら指令室にいる
が、違つたようだ。
「で、では俺が案内します！！」
「お前は医務室に行けさっきのは応急処置だ」
「では俺つすか？」
「お前は付き添いで行け」
「「ええ〜」」
「いやならあとで訓練を…」
「「分かりました（つす）！！」」
二人がダツシユで部屋を出ていく
「では案内する、ついて来い」
仮眠室と書いてある部屋から出て通路を歩く
「あの“大佐”とはどんな方ですか？」
とりあえず聞いておく
「偉大な方だ」
よく分からない答えが返ってきた。では
「ここは？」
「場所言えんが我々の基地だ」
流石に場所まで教えてくれなかった
通路を歩くこと数分
「着いたぞ、ここだ」

「あ、そうでした。はいこれです」

ポケットに入れていたチップを“大佐”へ渡す

「ありがとうございます」

そしてそのチップは“大佐”のポケットの中へしまわれた

「では鈴野さんあなたはもう自由です…、と言いたいところです
が、あなたの顔が相手に知られています」

あの異形になったほうに知られているそのせいで自分は危ないの
だろう

「ですのあなたに護衛をお付けします。もちろんあなたにも周り
にも気づかれないように」

「ありがとうございます…」

護衛が付くのはありがたいが何時まで続くのだろうか…

と、そこで聞かなければならないことを聞いてみる

「あの…。あなた方はいつたい…」

“大佐”は一瞬悲しげな表情をして

「私たちは簡単に言うと“異常者”です」

「“異常者”？」

どういうことだろうかやっぱりあの“能力”とかいう物のせいだ
ろうか。

「それは私たちが普通の人とは違う“能力”があるからです。そ
れに…」

急に立ち上がり言う

「私たちには“影”がありません。なぜだかは分かっています
が」

そう言われて気が付いた、彼女には影がなかった、よく考えてみ
ると川島たちにもなかった気がする

「それに私は無理ですが、1部のものは宙に浮くことができます。
これもどうしてだかわかつてはいませんが…」

たしかにあの2人は宙に浮いていたし、川島もそれができていた
「では次に場所はいいんですが、ここは？」

「ここは私たち“防人機関”です。防人は初代リーダーの名前からです」

「はあ…。では、あの襲ってきた人たちは？」

「彼らは私たちの敵で名称は不明です。彼らは私たちと違って一般人を根絶やしにしようとしています、ですから敵なのです」

さかのぼると“異常者”が出てきてのは戦時中らしくその時は軍事利用されたいらしい。

が、戦争に負けると利用できなくなったので軍に手を貸していた人たちは一斉に殺されたらしいが一部逃げ延びたものもいた、手を貸さなかった者たちは周りにばれないようにうまく隠れたり逃げたりし、生き延びてきた。

国のために闘ってきたのに最後には殺されそうになり、それに怒りを感じた一部逃げ延びた人たちが集まりできたのが敵の機関らしく、普通の人を強く憎んでいるらしく、それに同調した人たちも集まって今に至るといふ。

逆に、自分たちの力は普通の人にとって脅威だということを理解し、普通の人との接点をできるだけ切りひっそりと暮らしてきたのがこちらの機関らしいが今は昔とは違い接点を切らないようにし、自分たちと普通の人たちが手を取り合って暮らせる世界を目指し敵の機関から人を守っているそうだ。

さらに、どちらの考えにもつかないという中立の考えもいるといふがそれは少数派らしく今はあちらかこちらについている人もいるといふ

「なるほど…。彼らにはそんな事情があつたんですね…」

考えてみるとたしかにひどいと思う、使っただけ使って最後には捨てるなんて。でも

「たしかに彼らの言い分はわかりませんが、彼らは過去のことを引きずっていて、なにも変わるうとしていません。わかりあう気もなくただ滅ぼそうとしているだけです」

気が付くと彼女の組んだ手が震えている。

「…彼らのせいでリーダーが…」

急に弱い声で“大佐”が呟く

「リーダー？なにかあったんですか？」

聞いた後にしまったと思った、これは聞いてはいけないことだったのかもしれないと

「すみません、話が脱線しましたね。」

さっきの弱い声からもとの声に戻る

「他に聞きたいことは？」

「なぜここまで教えてくれたのですか？」

私は部外者のはずなのにごまかしもなく教えてくれた

「それはあなたはもうこちらの事情に巻き込まれていますし、今はまだ私たちは表にあまり知られていません、ですから教えました。」

たしかに敵に顔を覚えられた時点で私は関係者なのだ、すっかり見落としてた

「ではお送りしますので、比加辺」

「はい。こちらへ」

もう一人いた先ほどの青年がドアへと歩き出す

部屋を出てある程度歩くと屋外に出た。外は周りが海のようにこ

こはどこかの島らしい

ヘリが1機停まっておりいつでも発進できる状態だった

「ではこれを」

なにやらアイマスクのようなものを手渡される

「流石に一般人に基地の場所を知られるわけにはいけないので、すみませんが」

「わかりました、ではお願いします」

ヘリに乗りアイマスクを付けて数十分ほどたち地面に着陸した音が聞こえた

「もう外してもいいぞ」

操縦士の方がそうだったので外すと先ほどの河原についた

「ここからは護衛が見張るのでどうぞ」

「いえ、ここまで送って下さりありがとうございます」

「お手間を取らせました…、ではお気をつけて」

そのまま家路につく、護衛が付いてきているらしいがよく分からない…

「…くそっ！、だから言ったんだ、奴らとは戦わないほうがいいと。」

その少女は家に入っていた。

「いくらやつとは気が合わなかったとしても、仇ぐらいは取らせてもらわないとな…」

4話

ジリリリリリリリリ...

目覚ましが鳴る

「うう〜ん、朝か〜」

眠れないと思っていたけれど家に着いたら眠ってしまったようだ、別に今日は学校は休みだからもう少し眠っていてもいいのだが...

「今日は涼子と映画の約束だけ...。」

そう今日は友達と映画を見に行くのである

午後だからまだ時間はあるが...

いつもならどこか散策して時間をつぶすのだが昨日あったことを考えるととてもその気が起きない

「ほんとなら映画もやめておいたほうがいいのかも...」

携帯を出すために鞆を引き寄せて中を見ると手紙が入っていた

「何だろこれ？」

いつの間に入ったのだろうか、とりあえず読んでみる

『鈴野さんへ』

この手紙は読んだらすぐに破棄してください

あなたはいつも通りの生活をしてください。

護衛が必ずあなたをお守りします

では

セルステイル・ルーベンマイヤー大佐』

「大佐って階級から取ったあだ名なんだ...」

朝ご飯を食べて身支度し外へと出る

手紙では護衛が必ず守ると書いてあったがやっぱり命が狙われて
いる状況はかなり怖い

残り時間は書店でつぶし約束の時間になった

待ち合わせ場所で待っていると

「おそいな。涼子何かあったのかな？」

涼子を待っている

「おつまつたっせ〜!!」

「きゃっ!!」

後ろから急に来た

「ふふふ、三木ってほんとうにビビりだね。でもそういつころが三木のいいところだよ」

この子が朝内 涼子私の友達だ。クラスではムードメーカーであり私をあらゆる手で驚かしてくる

「で、三木昼食べちゃった？」

「ううん、まだだよ」

「え、まだだったの？」

涼子が深刻な顔をする

「え、涼子もう食べてきちゃったの？」

「全然。三木まだだろうと思って食べてないよ」

「驚いた。もう食べたのになって思っちゃったよ」

「ううん、ちよつと驚かせ具合が足りなかったか」

どつやらこれもいたずらだったらしい

「もう、涼子ったら〜」

「じゃあ何食べようか？」

「じゃあそこのレストランでも」

「ちっ…、一般人が一緒か…。あまり目撃者は増やしたくない、もう少し待とう」

「ん〜、おいしかったね」

「うん、あたりだったね」

昼を食べたので映画館へと向かうその時にはもうさっきまでの恐怖は消えていた

「映画の時間は？」

「私たち運がいいね、あと15分だよ」

「涼子すぐ入ろう」

「おうよ三木、ポップコーンはバターでいいかね？」

「いいよジュースはコーラで」

「合点承知ってね」

ポップコーンとジュースを買い急ぐ

「映画館か…。暗闇なら殺しはしやすい…。ここで仕留めるか…。」

その男の後ろから1人男が近づいて行った。

映画は大変面白かったそしてエンドスクロールの時

「三木危ない!!」

映画の感動の余韻に浸っていると横から涼子に突き飛ばされた
するとさつきまで座っていたところに異形の男が爪を長い爪を立てていた。

その男は例えるなら人に竜を足したような姿だった。

「邪魔をするな!!小娘!!」

「きゃっ!!」

涼子が殴り飛ばされる、その男は忌々しい目でそちらを見た後に
「せつかくのチャンスを…。まあいい敵討ちのためだ、皆殺しと
行こうか」

その男は目を怪しげに光らせてニヤリと笑った

照明がつく周りの人がこちらを見ている、だが男は気にしていない、ただこちらを見ている

「お、おいそこの変なやつ!!」

一人勇気を出して男に声をかける

「何をしてるんだ。け、警察を呼ぶぞ!!」

「警察…。そんなものが俺の相手になると…?」

つまらなさそうにそう呟く

「何を言って…!」

「いつもならこのような場では行わなかったが、もう構ってはいられない」

「だから、何を言ってる…!」

声が途切れる、見るとその人が宙を舞っていた。そしてそのまま壁に叩きつけられる

「皆殺しだよ」

一瞬の静寂

『う…、うわああああ!…!』

『なんだこいつやばいぞ!…!』

『だれか、警察を呼べ!…!』

『そんなことより早く逃げるぞ!…!』

辺りはパニックになる、異形の男はこちらへと近づいてくる

「おい、小娘。俺のことを覚えていないか？」

「え…、えつと…!」

急に聞かれて戸惑う。でもなにか見覚えあるような…

「あ!…あの時の!…!」

思い出した、昨日襲ってきた2人組の逃げたほうだ

『おい、嬢ちゃん何やってるんだ!早く逃げる!…!』

気づくと周りは誰もいないみんな逃げだしたのだ

「ふむ、やはり逃げるか…、まあいい。元からそんな気はなかったからな」

追わないところを見ると狙いは私だけのようで先ほどの脅しだったらしい

「では久々に会って突然だが死んでもらうよ」

「ひっ…!!」

異形の男はもう目の前まで近づいてきていた。

ゆっくりと腕を近づけてくる。その腕は少女一人殺すのには有り余っているほどだった

(ああ、私やっぱり死ぬのかな)

視界がぼやけてきた。泣いているのかも自分には分からない

(死ぬのなら、できるだけ苦しまずに……。)
そんな願望を男は聞き入れてくれたわけでもなく。その両腕で首を絞められる

(くっ…、苦しいっ…!!死ぬって苦しい…!!)

だんだんと力が強くなってくるのが分かる、肺が空気を求めるが、息がうまくできない。

(やだっ…!!死にたくないっ…!!死にたくないよ…!!)

死の恐怖がすぐそこまで来ていた、だんだんと意識が遠のいていく

(…だ…誰か…助け…)

4話（後書き）

ラストやりすぎて5話目に困ってます・、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2457ba/>

DEVISNT

2012年1月6日08時49分発行